

_____史学_____専攻_____領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 1 外国語（英語） / 専門科目（ ）

試験時間：（60）分

解答のポイント

近年、日本でもよく耳にするようになったパブリック・ヒストリー（公共史）について概要を理解できているか、パブリック（公衆）のための/について/とともに/によって、という英語の前置詞の使い分けを踏まえて説明できているかが鍵である。

史学 専攻 領域 (博士前期/修士 ~~・博士後期~~ ~~・前後期共通~~)試験科目：第 1 外国語 (中国語) ~~／ 専門科目 ()~~

試験時間： (60) 分

解答のポイントと採点の方針

梁啓超の著書、『中国之武士道』について論じた中国の学術論文（孫勃・張瑞潔「論中国之武士道：解読梁啓超心中的中国武士」『武術文化研究』第7巻、第1期、2010年）より出題した。

- ・中国語の読解力に加え、古典文学に対する基礎的な素養や、歴史的背景についての知識が求められる。
- ・時代の歴史的事情を踏まえた上で、本文を的確に理解し、正しく現代語訳できているかを重視する

I

II

III

史学 専攻 領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 1 外国語（フランス語） / 専門科目（ ）

試験時間：（ 60 ）分

問 1

問2 [解答のポイント]

16世紀のイタリア戦争の最中に、国王フランソワ1世とローマ教皇レオ10世の間で締結された／王国内の高位聖職者（大司教・司教・大修道院長）の国王による指名／近世ガリカン教会体制の出発点／フランス近世王権の宗教的・政治的次元での強化といった要素が含まれていればよい。

問3 [解答のポイント]

ブルターニュ地方やベアルン地方などを取り上げ、近世期における中央王権との関係性が必ずしも良好ではなかった地域が、フランス革命以降、中央（パリ）の意向とは反対の政治的・宗教的動向を取っていく様子が、具体的事例を添えて説明してあればよい。

史学 専攻 領域（~~博士前期/修士~~ 博士後期 ~~前後期共通~~）試験科目：第2 外国語（史料解読） ~~／ 専門科目（ ）~~

試験時間：（ 60 ）分

I 解答のポイント

翻刻（釈文）

文書A

東京大学史料編纂所編『大日本古文書』家わけ第21 『蜷川家文書之三』三九頁
五二一 吉田光慶書状（切紙）

文書B

東京大学史料編纂所編『大日本古文書』家わけ第21 『蜷川家文書之三』二二八頁
七〇一 松永久秀書状（折紙）

読み下し

文書A「下し給うべく候」、文書B「然るべく候」といった訓読の基本。

現代語訳（大意）

文書A：歳暮の美物五種類が上進されること、その披露と請取の下付を請う。

文書B：進上する美物について教示されたことを謝し、追而書では狸進上の可否について尋ねる。

II 解答

十一月一日（金）晴

遂に十一月になった。それなのに今日の暖気はどうしたことか。

十時に文部省の第一特別委員会に出る。教育の機会均等を討議した。

Diamond社で印税一万円を受取る。全く働いて得た金だ。十一時放送局で来る三日の為の憲法座談会に出た。

交詢社で来る四日のための放送原稿を書いた。三時から帝国水産で講演。

六時前帰宅。夕食。自動車の仲買人と話した。

十一月二日（土）くもり

朝、大阪新報記者、大滝、山本両君、奥主一郎君つぎつぎ来訪。

放送局に行つて四日に行はれる十五分間の憲法講演をRecordした。あはたぐしいことである。

一時自由党の総務会に出席。党役員の出欠をきめた。

二時半高島屋にて行はれる加藤、原谷両家の結婚仲人として出席。午後五時半終了。Young couple と自

動車で帰宅。手紙の整理などしたが疲れを感じた。

十一月三日（日）晴

別日記参照。今日は実に印象の深い日だった。

議会で陛下臨御の下に公布の式。昼食は議員食堂で祝杯。

午後二時宮城前の広場で東京都の都民祝賀大会。陛下御親臨。

そして集まる市民の熱狂！素晴らしい日だった。

夕方、総理官邸で憲法関係者の夕食。七時半帰宅。三史君夫妻、長谷の三人も来て自分の座談会のラヂオをきいた。

十一月四日（月）雨

十時から議長室で憲法精神普及連盟の委員会。

正午、塩原会を我善坊にて開く。

鳩山一郎氏、松野氏に久方ぶりに逢った。一時、日比谷公会堂に行く。東京都主催の憲法記念講演会。金森氏と私。私は主として国民の権、義と国会の話をしたが飛火して気焰をあげた。

雨の中を四時過に帰宅。

史学 専攻 領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 ~~外国語~~（） / 専門科目（共通・選択）

試験時間：（ 120 ）分

【 共通問題（博士前期課程・博士後期課程 共通） 】

問1

採点のポイント：大学院で専攻予定の分野（地域・時代）に関する研究史の理解度と表現力。

解答例：西洋中世史では「封建革命」論がこれにあたる。カロリング朝の衰退以降、古代に由来する公共権が弱まり、封建制と領主制を基盤とする中小の権力が台頭したとされる。その移行過程は緩やかなものであったみなされていたが、デュビーはマコネ地方の分析に基づき、紀元千年頃に突如として成立したと主張し、これを「封建革命」を名付けた。この主張は学界に大きなインパクトを与え、批判も含め、多くの議論が惹起した。

問2

採点のポイント：大学院で専攻予定の地域・時代と同地域の他の時代に関する理解度と表現力。

解答例：西洋中世は「古代の遺産」の上に成立したといえる。教科書的な理解では4世紀のゲルマン人の大移動や7世紀以降のイスラーム勢力の台頭により、古代世界の伝統は途絶えたとされる。しかし、初期のゲルマン諸国家はローマ帝国の行政的インフラを利用しなければ統治をおこなうことはできず、カロリング朝フランク王は教皇より「ローマ皇帝」として戴冠した。盛期中世以降もローマは、政治や文化の幅広い分野で常に手本される存在となっていた。こうした「表象としてのローマ」は、中世史研究における重要な研究テーマとなっている。

問3

採点のポイント：大学院で専攻予定の分野における史料や方法論に関する理解度と表現力。

解答例：歴史学においてマクロな視点とミクロな視点は、互いに欠くことのできない視座といえ、その意味でジャック・ルゴフは『煉獄の誕生』は模範的な研究といえる。彼は「煉獄」という概念が古代からどのように醸成され、12・13世紀にスコラ的体系化や経済的・社会的・芸術的な成熟を経て「煉獄の勝利」と呼ばれる決定的な定着をみたと主張し、長期的・構造的な見通しを述べている。他方で、個々の実証においては教父やスコラ学者の著作や公会議の決議などオフィシャルな史料のみならず、特定の修道院の聖人伝や幻視譚、説教文学、エクセンプラ（例話集）なども参照し、当時の人々において煉獄がどのような存在であったのかも照射している。

【 博士前期課程 選択問題 】 解答例または解答のポイント・採点基準

- 16世紀、日本にヨーロッパ人宣教師が入った際、日本文化への「順応」をとおして、現地との交流を考えた。その際日本文化に特徴的な要素をとりだし、日本人の感性が大切にするものをヨーロッパ人が理解するべきであるとしたヴァリニャーノなどのイエズス会宣教師は「茶の湯」（茶室等）への理解を深め、日本人との心の交流を真剣に模索しようとしたこと。こうした態度は16世紀の植民地政策下の世界では極めて希であり、歴史上の特筆に値することを説明する。

2. 江戸幕府の末期、尊王攘夷論が強まり、倒幕の意識が世間に浸透する際、後に公武合体などに通じる朝廷の地位を強化する傾向がみられたことはよく知られた史実である。その中心にいた天皇自身は、そうした世の中の流れにどのように対処したか。そして自身の立場をどのように確立していったか。単に、反幕府従来、孝明天皇は優柔不断でなかなか態度を明らかにしない為政者としてとらえられていたがその実体がどうなのかを、あらためて説明する。そうした世論と天皇個人の姿勢を描き出すこと。
3. 民俗学と歴史学の目的や方法論の差異・隔たり、両者の課題や限界について整理できるか。また、その課題・限界は両者を補完的に用いて克服することが可能か否かについて考えることができるか。具体例としてあげる歴史事象が適切か、といった点が解答のポイントとなる。
4. 増淵がいう「骨格」とは「法制的な外郭的機構」のことで、靉山は法制度との関係を抜きに民間の習俗や心性のみを論じても、古代社会の実像を明らかにすることはできないと述べた。本設問では、この指摘に対して、具体的事例をあげて論じることができているかを評価の対象とする。
5. アムール（黒竜江）下流域に居住したツングース系の狩猟・農耕民族、女真（のちの満州）は、明の影響下において毛皮・人参などの売買を通じて財力を蓄え勢力を拡大し、八旗を編制して満洲族を中心としつつ多民族を傘下に収める支配体制を確立した。このような清の統治体制についての理解については、満州語などの非漢字文献を利用した解明が進み、ユーラシア国家としての支配の多面性、柔軟性が見直されている。
6. 中国を中心とした東アジアの伝統的な国際秩序の特質と、それが近代国際関係と接触する中でどのように変容を遂げていくかを論じた一連の研究を取り上げる。そのなかで興味深いのは、次の2点である。一つは、東アジアの伝統的な国際秩序には、主権国家を単位とした近代国際関係とは異なった質の合理性が存在することが論じられていることである。そこでは、大国中国の一方通行のタテマエの論理だけではなく、その論理を巧みに利用しながら行動の自由や貿易の利益を追求する周辺諸国の「戦略」が展開されていた。そして、結果的には、境界の維持、衝突の回避、多様性の共存が図られていたことが明らかにされている。もう一つは、そうした国際秩序が近代の論理によって否定された後も、その理念は完全に消滅してしまうことなく、様々な場面で何度も姿をあらわし、一定の影響力を発揮したということである。しかも、本来のあり方とは似て非なる特徴を身につけていたり、記憶の中で理想化されていたり、政治的に都合よく利用されたりした。そこには前近代において作り出された特質が、それぞれの近代の有り様をも一定程度規定するという興味深い現象が浮かび上がっている。
(注：話題の選定は自由。ただし、なぜ魅力を感じるかについては明確に論じること)
7. 西洋古代史研究における主要な論点として挙げられるテーマについて理解し説明できるか、そしてそこに自身の精緻な実証研究を位置付けられているか、を問う。
8. 紀元千年頃のヨーロッパでは、封建制社会のもとで荘園における農業生産が経済の基盤であり、遠隔地貿易は限定的であった。しかし農具の改良や三圃制の普及によって農業生産力が向上すると、余剰生産物が生まれ、地域間交易が徐々に活発化していった。地中海世界では、イスラーム圏と接するイタリア商業都市が重要な役割を果たした。ヴェネツィアやジェノヴァ、ピサなどは、東方からもたらされる香辛料、絹、宝石などの高価な奢侈品を扱い、西欧にはワイン、木材、金属製品などを供給した。これらの交易は、東ローマ帝国やイスラーム商人との結節点としての地中海を中心に展開した。十字軍により人とモノの交流がさかん

になったことも大きく影響した。

11世紀から13世紀にかけては、北西ヨーロッパでも交易が拡大した。フランドル地方やイングランドでは羊毛生産が発展し、特にイングランド産羊毛はフランドルの毛織物工業を支える重要な原料となった。これにより、北海・バルト海沿岸を結ぶ交易圏が形成され、リューベックやハンブルクなどの都市を中心にハンザ同盟が成立した。ハンザ同盟は、毛織物、穀物、木材、毛皮、塩、魚（特にニシン）などの日用品・必需品を広域的に流通させ、北方交易を支配した。

14世紀にはペストの流行や戦争によって一時的な停滞が見られたものの、15世紀以降になると交易は新たな段階へと進んだ。イタリア都市は金融や為替手形・複式簿記などの商業技術を発展させ、交易を促進した。ポルトガルやスペインはアフリカとの交易路を開拓し、金や奴隷が取引された。この活動は15世紀後半以降の大航海時代を準備することとなる。

16世紀には新大陸の発見が決定的な影響を及ぼした。アメリカ大陸からは銀や金、砂糖、タバコなどがもたらされ、ヨーロッパ経済に大量の貴金属が流入した。とりわけスペインは新大陸銀を基盤に国際交易の中心となり、大西洋沿岸諸国の重要性が増大した。こうしてヨーロッパの交易は、地域的・量的に拡大し、地中海中心から大西洋中心へと重心を移しながら、近代世界経済の形成へとつながっていった。そして、こうした経済構造の変化は、近世ヨーロッパの政治や社会のあり方に大きな影響を与えたのである。

9. フランスの歴史家とその業績：フランスについては、アルファンス・オラール（国民国家形成のための歴史記憶の形成）、アルベール・マチエ（社会経済史的分析和ロベスピエール研究）、ジョルジュ・ルフェーブル（複合革命論）、アルベール・ソブール（「ジャコバン史観」）ミシェル・ヴォヴェル（フランス革命200周年、宗教史的視点）、ピエール・セルナ（文化史・植民地主義的視点）の業績に言及すること／日本については、高橋幸八郎・柴田三千雄・遅塚忠躬・松浦義弘の諸研究に言及すること。

研究上の課題：研究分野の細分化と統合の可能性への指摘や新たな研究領域への言及。

今後の可能性：自身の研究を出発点に、論点を展開すること。

10. 具体例が適切で正確か、イギリス側の視点で論じられているか、といった点を重視して採点する。

【 博士後期課程 選択問題 】 解答例または解答のポイント・採点基準

1. 社会史研究における食文化史研究の重要性について自身の見解を論理的に述べることができるか。室町・戦国期の料理と社会の関係を説明する際に、具体例が適切で正確か、当該期の社会に関する理解が適切か、といった点を重視して採点する。
2. 医療・福祉の救済対象としての子どもの養育を行う場としての家庭や、それを主に担う女性たちの生が規範化されたり、孤児院などにおける救済・保護事業において家庭性が重視されたことなどが具体例として挙げられる。子どもや家族についての一元的な規範化の問題点として、常に規範から逸脱したものを生み出し、「あるべき規範」から外れたものを「劣ったもの」とみなすことや、逸脱者を「救済する者」と「救済される者」の間に序列関係を生じさせることが指摘できる。
3. 簡牘史料には実務的・日常的な行政文書や記録が含まれており、現場での運用実態や柔軟性を重視する研究視角が確立された。また、地域ごとの特徴も明らかになり、古代国家を一枚岩的な統治機構として理解する従来像を修正し、地域差を前提とする歴史像を提示できるようになった。簡牘史料の出現は、古代史研究を「社会の実態解明」へと転換させたといえるが、一方で、出土状況に左右される史料である以上、過度な

一般化には慎重であるべきであり、伝世文献との相互批判的読解が不可欠である。

4. 西洋古代史研究における主要な論点として挙げられるテーマについて理解し説明できるか、そしてそこに自身の精緻な実証研究を位置付けられているか、を問う。

